

令和3年度 一般選抜 I 期 入学試験問題

国 語 (50分)

注意事項

1. 「始め」の合図があるまで、この問題冊子を開いてはいけません。
2. この問題冊子は全部で10ページです。印刷不鮮明などの箇所があった場合は申し出てください。
3. 答えは解答用紙の所定の欄に記入してください。
4. 使用する問題用紙と解答用紙の指定欄に**受験番号** (数字) を必ず記入してください。
5. 解答作業には必ず**黒の鉛筆** (HB以上) または**シャープペンシル**を使用し、ボールペンや色鉛筆などを使ってはいけません。
6. 試験終了後に、解答用紙、次に**問題冊子**を回収します。問題冊子の余白や裏面は、**下書き**に使用してもかまいません。
解答用紙は破ったり、汚したりしないでください。
7. 「やめ」の合図で、すぐに筆記用具を置き、静かに待っていてください。

次の文章は音楽家の娘の私が主人公である。これを読んであの設問に答えなさい。

秋の体育祭と文化祭が終わると、急に空が高くなる。空気の匂いが変わる。香ばしさが風にかすかに混じり、住宅地の中を抜けて行くだけなのに、みよりの季節が近づいているのがわかる。ようやく穏やかな日々が戻ってくる。体育祭や文化祭の^①ニギ々しさが私は苦手だ。今さら走ったり、踊ったり、新鮮味のない模^②ギ店を出したり、そういうことをさせられるのが^③オツ劫でならない。終わってほつとした。退屈な日常でも、喧噪よりはいい。

それなのに、まただ。ホームルームの最後に、そろそろ合唱コンクールの準備を、と佐々木さんが言ったのだった。何がそろそろだ。文化祭が終わったばかりじゃないの。ひとつ終えるとまたひとつ、秋は行事のペースが速くなるらしい。

「まだ少し先のことですけど、早めに準備して、いい結果を残せるといいなと思ってます。」

クラス委員の佐々木さんはそう締めくくった。合唱コンクールなんて興味もないけれど、それでも、いい結果を残せるといい、というのはちよつと違うだろうと思ってしまう。結果を残すために歌うんじゃない。結果の前に原因がある。あるいは、過程。そっちのほうが大事なんじゃないのか。——ついそんなことを考えてしまつてから、関係ないなと思う。私にはどうでもいいことだ。そしてたぶん、クラスみんなにとつても。

毎年、秋の終わりにクラス対抗の校内合唱コンクールがある。仲間と力を合わせ、声を合わせよう。そう書かれたポスターを去年も見ている。力を合わせるために声を合わせるのか、声を合わせるために力を合わせるのか。どちらが正しいというものでもないだろうけど、私はポスターの前で立ちどまつた。クラスの団結が目的で、合唱は手段になつてしまつている。歌を利用していることへの軽い^A憤りを、どうでもいいじゃないそんなこと、と声に出してかき消した。

そもそもたいていの生徒にとって合唱コンクールの優先順位は低い。校内イベントの中でも最下位か二番手、三番手あたりをうろうろしていると思われる。マラソン大会といい勝負かもしれない。むしろマラソンのほうが嫌われている分だけ存在感がある。合唱は歯牙にもかかられずその辺に放っておかれている。

そういえば去年、熱心なクラスがあった。^④ タン任の力なのか、誰か指導力のある生徒がいたのかあるいは合唱部に属する生徒が多かったのか、見事な歌声を聴いた。校内合唱コンクール程度でここまでの合唱を聴けるとは思っていなかったほどだ。

最初は放課後だった。校舎のどこから合わせる声が聞こえてきた。たどたどしく、おそろおそろ、の声。ちょうど今ごろの季節だったと思う。まるでばらばらに聞こえる日もあった。それが日を追うごとにまとまっていった。張り上げすぎていたソプラノに艶が出て、アルトがぐんと響き出す。そうそう、その調子、と私は鞆を提げて校舎をぐるぐる歩きまわった。生徒玄関まで行くと声は届かなくなってしまいうから、わざとゆつくり階段を上り下りした。普通の生徒でも練習次第でこんなに変わるのかと胸を打たれていた。

それに比べ、私のクラスは話にならなかった。おぎなりな練習しかせず、それだつて不参加の人が多くて、もしかすると楽器なしでは最後まで歌えない人もけっこういたかもしれない。誰もなり手がなくて結局ジャンケンで決まった指揮者が機械的に指揮棒を振るだけで、私も声を出さなかった。声楽の発声で合唱はできないし、歌つて目立つのも嫌だった。

クラス^⑤ ガえはあつたものの、今年だつて似たり寄つたりだ。そろそろ合唱コンクールが、と佐々木さんが言ったとき、しらっとした空気が流れた。文句さえ出なかった。もちろん、私も同じだ。関係のない話だと思つた。この高校に入つてからというもの、すべてのことが私には関係なく過ぎてゆく。

翌週のホームルームで議題が合唱コンクールのことになったときも、私は^B 窓から外を眺めていた。中庭の櫛が色づいている。いい季節になった、と思う。温度も湿度も適度にあつて、声帯に弾力が出る。声が伸びる。音大の受験を考えるなら、そろそろ本腰を入れて準備をしなければいけない時^⑥ キだった。

「誰か、指揮をやりたい人、やってもいい人、いませんか。」

議長の佐々木さんが壇上から呼びかけている。指揮なんかやりたい人がいるわけがない。どうせまた決まらなくてジャンケンかクジになるんだろう。

頬杖について、高い空に飛行機雲が伸びていくのを見上げたとき、

「御木元さんがいるでしょ。」

という声が出た。驚いて声のほうを見たけれど、誰だかわからなかった。

「そうだ、御木元さんがいるじゃん。」

「御木元さんがやればいい。」

教室のあちこちから声上がる。そのとき、わかった。みんな、知っていたのだ。私が御木元響の娘だということ。そしてきつと、音大の附属高校に落ちてここにいることも。

さざ波のように広がった声はとて^⑦もコウ意的には感じられなかった。母親が音楽家なのだから娘もそれなりに何かできるはずだと、ただそれだけの理由で自分たちの厄介ごとを押しつけようとしている。

「御木元さんがやつてくれたらいいと私も思います。」

立ち上がってそういった人がいた。^C声^Cが素直で救われた。

議長が私を見た。

「お願いできますか。」

「何を。」

聞き返すと、発言者はもう一度立ち上がり、^⑧ハ^Bずかしそうにちよつと振り返って私を見た。

「指揮か、ピアノ。それか、指導だけでもいい。」

「どうして私が。」

すると彼女はほんの少しためらった後で口を開いた。

「御木元さんは音楽が好きそうだから。」

虚を衝かれて返事ができなかった。

「お願いできますか。」

もう一度議長に聞かれて、^Dう^Dなずいていた。音楽が得意そうだから、と言われていたら^⑨コト^Dワ^Dっていたかもしれない。でも、音楽が好

きそうだからというあまりに素朴な声に少し気持ちが悪く感じた。音楽が好きかどうか、今となっては自信もないのだけれど。

「じゃあ指揮を。」

私が答えると、黒板に、指揮・御木元玲と書かれた。

ピアノはいつまでも決まらなかった。弾ける人がいないわけでもないだろうに、名前の挙がった人同士で押しつけあっている。渋々弾くよ。うなピアノを聴くのは苦痛だ。

あ、と思った。さつき私を指名した人。今まで話をしたこともなかったけれど、たしか音楽室でピアノを弾いているところを見たことがある。同じクラスになる前だったはずだ。音楽の授業の後で忘れ物を取りに戻ったら、ボブというよりはただ切り揃えただけみたいな髪型の小柄な子がひとりうれしそうにピアノを弾いていた。私が見ているのに気づくと彼女は慌てて弾くのをやめたばかりか、ピアノの前から飛び退ったのだ。

「原さん。」

呼びかけると、前のほうの席でぶつ切りの黒髪が小さく、^⑩ハズむのがわかった。

「——ピアノ、弾ける？」

席にすわったままこちらを振り向いた彼女が戸惑ったように小さくうなずいた。

「じゃあ原さんにおねがいしてもいいですか。」

議長がすかさず原さんに確認を取る。なに、あのふたり、と声が聞こえる。お互いを推薦しあっているよ。原さんと御木元さんで仲よかつたつけ。そんなことはどうでもいい。少しでも音楽をやる気のある人と組みたいだけだ。

(宮下奈都『よろこびの歌』による)

問1 文章中の傍線部①～⑥を漢字に直して楷書で記しなさい。

問2 文章中の傍線部⑦～⑩を漢字で表わした場合、それと同じ漢字を用いるのはどれか選りなさい。

⑦ コウ意的

ア 屋根のコウ造上の欠陥が見つかった。

イ 宿敵に勝利して最コウの気分だ。

ウ 七味入りニンニクが私の大コウ物です。

エ 何ごとにもコウ上心を持って取り組むのが上達のコツだ。

⑧ ハ|ずかしそう

ア 朝までの宴会は文字通りの酒チ肉林だった。

イ 不倫芸能人の厚顔無チな記者会見がワイドショーで放映された。

ウ あの洋菓子店の人気商品は産チ直送のリングゴを使ったアップルパイだ。

エ 受験勉強で過去問を練習するのは温故チ新の良い例かもしれない。

⑨ コトワ|っていた

ア あの交差点には横ダン歩道が無くて危険だ。

イ 仙台市は河岸ダン丘を町作りに活かしてきた。

ウ 経済政策を巡って圧力ダン体が協力体制を取る見込みだ。

エ 監督の試合後のダン話がチームの強さを物語っている。

⑩ ハズむ

- ア あの道は四輪ク動の自動車でも難しい悪路だ。
- イ 開発したロボットがひらりとチヨウ躍して障害物を越えた。
- ウ 建物のガイ壁は全て赤レンガで出来ていた。
- エ 白熱の投手戦はダン丸ライナーのホームランで決着した。

問3 文章中の傍線部A「憤り」とありますが、それはどういう理由によるものですか。最も適するものを選びなさい。

- ア 歌うことそのものが好きなのに、団結のためという目的に反発を感じていたから。
- イ 歌うことが好きなのに、合唱コンクールの優先順位が低いから。
- ウ 合唱を見せかけに生徒をある一定の方向に誘導しようという意図を感じたから。
- エ 優先順位の低い合唱コンクールという存在そのものに意味を見出せなかったから。

問4 文章中の傍線部B「窓から外を眺めていた」とありますが、このときの「私」を説明したものととして最も適するものを選びなさい。

- ア 音大の附属高校の受験に失敗した心の傷を抱えて高校生活に馴染めないでいる。
- イ 話し合いに無関心な振りをしながら、前年の合唱コンクールを思い出している。
- ウ 歌に良い季節なので、クラスのことより私の歌の将来について心配している。
- エ クラスでの話し合いに興味を持たず、漠然と将来の音楽の道について考えている。

問5 文章中の傍線部C「声が素直で救われた」とありますが、これはどのようなことを表していますか。最も適するものを選びなさい。

ア 面倒ごとを押しつけ合う空気の中で、私に指揮をしてほしいという誠意のある声に私の嫌な気持ちが吹き飛んだということ。

イ 私の才能に嫉妬する空気の中で、私に好意的な人がいることがわかり安心して安らぎを感じたということ。

ウ 誰が嫌なことを引き受けるか探り合っている空気の中で、素直な心情を聞いて嫌なことでもやってみようと思えてきたということ。

エ 音楽家の娘なのに指揮をしないことを非難する空気の中で、素直な言葉に私の心が軽くなったということ。

問6 文章中の傍線部D「うなずいていた」とありますが、これはどのようなことを表していますか。最も適するものを選びなさい。

ア 話をしたこともない人から推薦され虚を衝かれたところに、議長からお願いを畳み掛けられて思わず引き受けてしまったということ。

イ これ以上の話し合いは無駄だとあきらめ、この場を取めるためには引き受けるしかないという義侠心から引き受けたということ。

ウ 予期せぬ展開に困惑しつつも、話をしたことがない人からも願わされて、音楽志望としての誇りから断れずに引き受けたということ。

エ 同級生の率直な言葉に驚くと同時に、私の心の奥底にある歌への情熱が沸き立ち、思わず引き受けてしまったということ。

オ 音楽家の娘なのに指揮をしなかったら大好きな母親に迷惑をかけると思い、それを避けるための孝心から進んで引き受けたということ。

次の文章を読んであとの設問に答えなさい。

私たちの日常生活を形成する現実はいかに複雑であり、歴史的な事実とは、ある歴史家がみずからの判断により無限に多様な現実のなかから一部の事実を①抽出して真実として描き出したものにすぎないのである。このように、私たちは限られた事実から構成された歴史を、不完全なものとして学ぶことしかできないのである。

1

2

3

4

歴史的事実を成立させる条件についての問題関心から、歴史的表現がもつ限界を言語哲学の方面から研究したのが、文芸批評の影響を受けた歴史学者であるヘイドン・ホワイト(H. White)である。ホワイトは、一九世紀のヨーロッパにおける歴史的想像力を理論的に考察した『メタヒストリー』や『言述の②喩法』といった書物のなかで、歴史的な現実を歴史の表現として構成する際の、歴史家の想像力や表現が採用せざるをえない喩法の問題を論じた。

5

客観的な歴史は存在しない、頼りにできるのは記述された言語だけであり、究極の現実を知ることとは不可能である。ホワイトがこのような指摘を行ったのは、何も歴史を否定するためではなく、歴史を表現することの難しさを指摘することにより、歴史が「現実」の単純な模写であるという、旧来の歴史観に③警鐘を鳴らすことが目的でもあった。こうした言説と現実との実体的な結びつきを否定する考え方は、ポストモダン歴史学と呼ばれ、伝統的な歴史学の考え方、つまり、書かれた文字資料に基づいて、唯一の歴史を描くことができるという考え方に反省を促したという点で、一定の評価をされるべきものである。くり返すが、歴史を書くというのは、もともと見る時代や人によって異なる現実を、暴力的にひとつの見方からまとめるという、一種の飛躍を伴った行為でもある。歴史学者は、こうした飛躍の存在について意識的であ

るべきであり、方法的に謙虚であるべきである。そうした方法的謙虚さのなかからこそ、ステレオタイプな解釈に縛られない、斬新な過去のイメージが紡ぎ出されていく。ホワイトが提起しようとしたのは、そうしたダイナミックで生産的な歴史学の姿だったのである。

6

7

ポストモダンの歴史学がもたらしたのは、歴史は常に、その時代を生きる人々に開かれているという気づきであった。つまり、歴史は完成したものとして私たちの外部に存在するのではなく、私たち現代人に開かれ、ことあるごとにその再解釈が求められているということである。

(山本拓司「歴史のなかの私たち」による)

A 映画『羅生門』が描き出したのは、真実は当事者の数だけ存在するという、出来事の解釈の唯一性の否定であった。映画が示すほど極端ではないにせよ、ある出来事をめぐり当事者たちの証言が異なることは往々にして体験されているのではないだろうか。メディアで報道される犯罪事件をめぐっても、互いに食い違う当事者たちの証言が漏れ聞かれるのは、日常茶飯事である。ひとつの出来事でありながら、当事者たちの証言がまったく異なる事態は、「羅生門効果」と呼ばれている。ひとくちに事実といっても、実はその確定には困難が伴うのである。

B 平安時代の都に近い山中で、侍の死体が発見される。容疑者として捕らえられた多襄丸が旅途中の夫婦のうち侍である夫をだまして縛り、さらに侍の前で妻に暴行したという。

検非違使庁で行われた検分には、事件の目撃者である杣売りと旅法師、そして容疑者としての盗賊と、殺された侍、そしてその妻が呼び出される。侍はすでに死んでいるので、霊媒を通して証言する。驚くべきことに五人の口からは、微妙に異なるどころか、すべて食い違う証言が飛び出すのである。

C 映画『羅生門』が示すように、現実の描かれ方は、目撃する人によってまったく異なったものになりうる。同じ場所や時間を共有していても、人によって描く過去の姿が異なりうるということなのである。出来事の当事者の証言によって描かれる過去の姿がこれほど揺れ動くものであるとするならば、すなわち、歴史的事実の確かさを成り立たせる根拠がこれほど危ういものであるとするならば、フィクションやノン・フィクション、あるいは文学と歴史の境界は、非常に曖昧なものとなってしまうのだろうか。

D もっとも、時期や細かな事実についての認識のずれにとどまらずに、ひとつの出来事について、大きく食い違う解釈が飛び出すこと

が日常でもある。ある出来事について、それを観察した人によって、描き出される姿がまったく異なってしまうという事態を描き出したのが、黒澤明監督の名作映画『羅生門』（一九五〇）である。平安時代の山中で起こった殺人事件をめぐり、目撃者や当事者たちがどのように証言し、あるいは行動するか、深い人間観察をもとに描き出した傑作である。

X 過去の描写の唯一性を否定し、多様な解釈がありうるという相対主義的な考え方によると、複数の視点で描かれた歴史表現のうち、どれが正しく、どれが間違っているかを確定する理論的な根拠は存在せず、いずれの表現も等しく真実であるとも可能である。しかしこうした考えは、生身の身体を備えた人間が構成する社会では不都合となる。真実は「藪の中」では困るというのが、私たちが暮らす世の中である。殺人事件が起こって、誰がどのような経緯で犯行に及んだのか、時間をかけて永遠に事実の再解釈をくり返しながら捜査を進めたのでは、遺族はたまつたものではない。社会秩序の維持という観点からも問題であるし、隣接する国家のあいだで領土問題が起こった時にも、合理的に解決する手段がなければ、国際秩序が成り立たないのである。

Y また歴史問題に即してというと、戦争犯罪では、この問題はもつと先鋭化してくる。上述の相対的な考えは、過去についての公共的な理解を、イデオロギー的に修正しようとする歴史修正主義と結びつく。そして人類史上例をみない悲劇であったナチスによるユダヤ人の虐殺——ホロコーストの問題についてさえ、相対主義をもち出せば、肉親や愛する人を虐殺されていまだ壮絶な記憶に苦しみ続ける人を前に、そのような歴史的事実があつたと客観的に示すことはできないと述べることすら可能なのである。このようにポストモダン歴史学は、その学問的な意義とは別の次元において、非常に繊細な問題として浮上する。

Z ホワイトによると、現実の理解とは《よくわからないもの》である現実を、《よく知っているもの》として理解する過程のことであり、この理解の過程は、比喩的なものを通してしかありえない。そしてこの比喩は、いくつかの種類に限定されてしまうというのである。言い換えるならば、人間が世界を表現するために用いることができる表現方法は、これら喩法のいずれかに当てはまるということなのである。現実はあるのままに表現されることはなく、比喩的なものでしか表現されない、つまり歴史は比喩でしかなく、その点でフィクションに比べて特権性を有する根拠をもたないというのである。

問一 文章中の空欄

1

4

に最も適する段落をA～Dの中から選びなさい。同様に、空欄

5

7

に最も適する段落をX～Zの中から選びなさい。

問二 文章中の傍線部①～⑭の漢字の読みを平仮名で記しなさい。